

欲望か快樂か

慎改康之

『情況』（第4巻第7号）に掲載

これは Microsoft Word によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。  
『情況』に掲載されているテキストと若干異なる部分があります。

## 欲望か快樂か

慎改康之

「欲望と快樂」というタイトルのもと、『マガジヌ・リテレール』誌一九九四年十月号に掲載されたジル・ドゥルーズのテキストは、ミシェル・フーコー宛てに書き記された一種の「覚書」である。一九六二年にクレルモン・フェランにて出会って以来、この二人の哲学者は、長年にわたり知的交友を深めてゆく。しかし、一九七七年にフーコーが『アンチ・オイディプス』アメリカ版の序文を書き、ドゥルーズが『監獄の誕生』の書評を書いたのを最後に、この交流が途絶えることになる。ドゥルーズの「覚書」は、この年、フーコーに手渡されるべくフランソワ・エヴァルトに託された。エヴァルトによれば、それは、中断されてしまった対話を再び開こうという、「友情の誠実さによって全体を貫かれた招待」であった<sup>1</sup>。

周知のとおり、後にドゥルーズは、フーコーの「哲学」全体を一つの見事な「肖像画」として描き出した『フーコー』という書物を著すことになる。しかし敢えて我々がここでもっぱら一九七七年の短いテキストに注目しようと思うのは、一九八六年の著作が二人の共通点や相違点を問題とはせずあくまでもフーコーの「分身」として自らを提示しているのに対し<sup>2</sup>、この「覚書」においては、フーコーに対するドゥルーズ自身のスタンスが明確なかたちで示されているからだ。いわば自身の思考を差異として提示しつつ、ドゥルーズは、対話を再開すべくフーコーに対して問いかけているのである。しかし結局、この問いは返答のないままにとどまり、そしてドゥルーズ自身もそれを再び取り上げて考察し直すことはなかった。そこで我々は、宙吊りのままにとどまったこの問いかけに対して、フーコーの側からの一つの回答をここに試みてみたいと思う。もちろん、フーコーの側からの回答、と言っても、それは、フーコーに代わって語ろうなどという傲慢な企てを意味してはいない。また、エヴァルトも指摘するとおり、ドゥルーズの問いかけが「批判でも、ましてや論争でもない」<sup>3</sup>以上、弁護や仲裁が問題になるわけでもない。そうではなくて、ここで試みたいのは、フーコーの思考を一つの差異として際立たせてみることである。すなわち、フーコーのドゥルーズに対するスタンスを、フーコー自身の言葉を忠実にたどりつつ、出来る限り正確に描き出してみたいと思うのだ。実際、二人が再び顔を合わせること

---

<sup>1</sup> *Magazine littéraire* n°325 octobre 1994, p.58. (フランソワ・エヴァルトによる「欲望と快樂」への前書き)

<sup>2</sup> Gilles Deleuze, *Pourparlers*, Paris, Minuit, 1990, p.139. [『記号と事件』、河出書房新社、一九九二年、一七一頁]

<sup>3</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.58.

はなかったとはいえ、後の彼らのテキストに目を通して見るなら、そこでは彼らの哲学的な対話がいわば潜在的なやり方で続けられているように思われる。我々の任務は、したがって、そうした潜在的な対話を可能な限り現実化しようと試みることになるであろう。

## 権力と欲望

まずは、「欲望と快楽」におけるドゥルーズの問いがどのようなものであるかということを確認に示すことにしよう。この「覚書」がエヴァルトに託されたのは、一九七七年、すなわち、フーコーの『性の歴史』第一巻『知への意志』が出版された翌年のことである。したがって、そこでの問いがとりわけこの書物にかかわるものであるということは容易に推察されよう。実際、「欲望と快楽」の問いかけは、『知への意志』および一九七五年公刊の『監獄の誕生』における権力分析が提出する諸問題に焦点を定めている。

権力の問題を前面に押し出した最初の著作である『監獄の誕生』において、フーコーは、「権力のマイクロ物理学」を提唱する。これはすなわち、権力関係を分析するに際して、国家や諸制度といったマクロのレベルに注目するのではなく、個々の身体というマイクロのレベルに注目しようというものである<sup>4</sup>。権力分析のそうした新たな手法によって、フーコーは、権力をそのネガティブな機能に還元しようとする伝統的なやり方と袂を分かち、知を形成し真理を構成するというポジティブな機能を持つものとしての「権力の装置」を描き出したのであった<sup>5</sup>。ドゥルーズは、フーコーのこうした「マイクロ分析」の重要性を指摘しつつ、それがどのような性質のものであるかということについて問いかける。ドゥルーズによれば、フーコーの権力分析におけるマイクロとマクロの差異は、単なる大きさや尺度の差異ではない。しかし、二つの次元がそのように異質なものであるとするならば、マイクロ分析のレベルにおいて依然として「権力」を語り続けることは果たして可能であろうか。「ミシェルが言うとおり、国家をミニチュア化することが問題ではない以上、国家という概念をマイクロ分析のレベルに適用することはできない。しかし、権力という概念は、それよりも適用可能であるだろうか。この概念もやはり、包括的概念のミニチュア化なのではあるまいか<sup>6</sup>。」そしてここに、ドゥルーズとフーコーとの差異が明示されることになる。すなわち、フーコーが権力の戦略ないし戦術を描き出すマイクロのレベルにドゥルーズ

---

<sup>4</sup> Michel Foucault, *Surveiller et punir*, Paris, Gallimard, 1975, p.31. [『監獄の誕生』、田村淑訳、新潮社、一九七七年、三〇頁] (「(・・・) 身体に関する政治的テクノロジーを、特定のタイプの制度や国家機構のうちに局所化することはできまい。制度や国家機構は、そうしたテクノロジーに訴えるし、その方式のいくつかを利用したり、価値づけたり、強要したりもする。しかし、このテクノロジーそのもののメカニズムやその効果は、全く別のレベルに位置づけられる。そこにあるのは、権力の一種のマイクロ物理学である。すなわち、国家機構や制度のもとで作用するとはいえ、その有効性の領野はいわばそうした大々的な機能と、物質性と力とを備えた身体そのものとのあいだに位置するような、権力のマイクロ物理学なのである。)」)

<sup>5</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.59. [一四〇頁]。

<sup>6</sup> Gilles Deleuze, « Désir et plaisir », *Magazine littéraire* n°325, p.60. [「欲望と快楽」、『文藝』一九九六年春季号、一四〇頁]

ズが見いだすもの、それが、「欲望」なのだ。

そもそも、ミクロとマクロ、「分子的」と「モルの」との区別は、ドゥルーズがフェリックス・グアタリとともに著した一九七二年の『アンチ・オイディプス』において、無意識および資本主義の分析のために提唱されたものであった<sup>7</sup>。実際、フォーコー自身、この書物に多くを負っているということを『監獄の誕生』のなかで明言している<sup>8</sup>。それでは、ミクロのレヴェルに見いだされるものとしてドゥルーズ=グアタリが語る欲望とは、いったいどのようなものなのであろうか。

欲望は一般に、「何か」を欲することとして定義される。すなわち、欲望は通常、何らかの単一な対象への傾向として思考されるということであり、そこから、欲望にはそうした対象の「欠如」が含意されることにもなる。しかし、ミクロのレヴェル、分子的なレヴェルに身を置くと、そうした既成の欲望概念は根本的な変容を迫られる。実際、欲望は、「人物や事物だけではなくて、自らが遍歴する場の全体を自分の対象としている」<sup>9</sup>。たとえば、「私は彼女を欲望する」、と言うとき、その欲望は、ただ単に一つの人格に向かうわけでもなければ、ましてやセックスのみを目指すわけでもなく、彼女を取り巻くと同時に彼女自身が包み込んでいる風景との関係のなかで初めて生じるものである。また、一人の女性が一着の服を欲望するとき、そこで問題になっているのは、それをいつ着るのか、どこに着ていくのか、誰の前で着るのか、などといった事柄の総体である<sup>10</sup>。要するに、欲望とは、単一な対象への傾向とその対象の欠如としてではなく、さまざまな要素の「組合せ」として、そしてそれによって生じる「流れ」として理解すべきものであるということだ<sup>11</sup>。そしてドゥルーズは、このようなものとしての欲望こそが「社会野の構成要素」であり、「下部構造」であるとみなす<sup>12</sup>。たとえば封建制社会とは、馬、騎士、十字軍、女性といった要素の組合せであり、「欲望はそうした異質なものの組合せのなか、そうした「共生」のなかを駆け巡る」<sup>13</sup>。そしてそこにはもちろん権力と呼びうるようなものが生じるであろうが、それはもはや「構成的なもの」としてではなく、「組合せのなかの一部品」とみなされなければならないだろう。「要するに、権力の装置が組合せをつくるわけでも構成的であるというわけでもないだろう。そうではなくて、欲望の組合せこそが、その一つの次元にしたがいつつ、権力の形成を広く分布させてゆくのだ、と言えるであろう」<sup>14</sup>。このように、ドゥルーズによれば、社会野の構成にとって第一義的なのは欲望であり、その流れである。そ

<sup>7</sup> Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'anti-Œdipe*, Paris, Minuit, 1972. [『アンチ・オイディプス』、河出書房新社、一九八六年]

<sup>8</sup> *Surveiller et punir*, p.29. [三五頁]

<sup>9</sup> *L'anti-Œdipe*, p.348. [三四七頁]

<sup>10</sup> ドゥルーズは、フランスのテレビ局 Arte のために収録され、後のビデオとしても発売されたインタビュー番組のなかで、「欲望」に関して例を挙げながら具体的に説明している (« D comme désir », *Abécédaire de Gilles Deleuze*, Éditions Montparnasse)。

<sup>11</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.60. [一四一頁] Cf. *L'anti-Œdipe*, p.11. [一七頁]

<sup>12</sup> *L'anti-Œdipe*, p.416. [四一四頁] (「スキズ分析の最も一般的な原理は、欲望が常に社会野の構成要素であるということである。いずれにしても、欲望は、下部構造なのであり、イデオロギーではない。」)

<sup>13</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.60. [一四一頁]

<sup>14</sup> *Ibid.*, pp.60-61. [一四一頁]

して、そうした欲望の組合せを変質させ、方向を変えて、押しつぶすものが、権力なのだ。ドゥルーズにおいて、マイクロ分析の要素はあくまでも欲望なのであり、その限りにおいて、権力は二次的なものにすぎないのである。

そして、仮に権力に対して何ものも優先させないとき、そこに不可避免的に生じる問題として、ドゥルーズは、「抵抗」の問題を挙げる。もし「権力の装置」が構成的であるとするなら、それに対抗するものとしては抵抗しかあり得ないことになるが、それではこの抵抗をどのように考えればよいのか。『知への意志』においてフーコーは、抵抗が権力に外在的なものではないということ、そもそも権力は複数の抵抗点との関係においてしか存在しえないということを語っているが<sup>15</sup>、それはドゥルーズを満足させるものではない。というよりもむしろ、ドゥルーズにとってそもそも抵抗の問題は、いわば偽の問題である。というのも、社会野を欲望の流れによって構成されるものとみなす限り、権力はその流れをふさぎ止めようとするものにすぎず、二次的な現象としての抵抗をどう位置づけるかという問題が生じることはないからだ。したがって、ドゥルーズの問いは、フーコー的な権力分析の可能性そのものにかかわっている。フーコーの権力概念に自らの欲望概念を対置しつつ、彼は、権力を優先させること、構成的なものとして語ることが、いったいどのようにして可能であるのかと問いかけているのだ。

#### ナチュラル 自然本性の産出

ドゥルーズの問いに対する回答に取りかかる前に、まず次の準備的な問いについて検討することにしよう。すなわち、そもそもフーコーにおける権力の優先はいったい何を含意しているのか。彼において権力を構成的なものとして提示することを動機づけているのは、いったい何であろうか。

ここまで見てきたとおり、ドゥルーズは、欲望こそが第一義的であり、権力はそれに対して二次的なものであると考える。その限りにおいて、権力は、欲望を妨げ、抑圧するものとして現れることになるだろう。「私においては権力に対して欲望が優先するゆえに、あるいは、私にとって権力の装置は二次的な性格を持つゆえに、そうした装置の作動は抑圧的な効果を保持している」<sup>16</sup>。ところで、フーコーが『監獄の誕生』以来一貫して拒否するのは、権力を抑圧的なものとして語るという、まさにこのことである。すでに触れたように、彼は、とりわけ近代の西欧において作動しているようなものとしての権力の特徴が、そのネガティブな機能によってではなく、むしろその「ポジティブな効果」によって示されるという点を強調している<sup>17</sup>。フーコーにおける権力の優先は、したがって、権力を抑

<sup>15</sup> Michel Foucault, *La volonté de savoir*, Paris, Gallimard, 1976, p.125-127. [『知への意志』、新潮社、一九八六年、一二三—一二四頁]

<sup>16</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.61. [一四二頁]

<sup>17</sup> Cf. *Surveiller et punir*, p.28 [二七頁]（「処罰のメカニズムについての研究をその単なる「抑圧的な」効果やその「制裁的な」側面を中心にして行うのではなく、それによってもたらされる一連の「ポジテ

圧の語彙によって語ることのこうした拒否との関連において理解すべきであろう。というのも、権力以前の何かを第一義的なものとして想定する限り、必然的に、権力は抑圧的な効果をもたらすものとして現れざるをえないからだ。権力に対して何ものをも優先させまいとするフーコーの態度は、このように、何よりもまず権力分析を抑圧中心の思考から解放しようという努力によって動機づけられているのである。

そしてまた、フーコーのこうした態度のうちには、過去の自分自身の研究をめぐる自己批判が含まれていることにも言及しておく必要があるだろう。一九六一年公刊の『狂気の歴史』において、フーコーは、西欧の歴史のなかで抑圧されてきたものとしての狂気について語っていた。かつては多様なやり方で経験されていた狂気が、十七世紀後半には理性にとつての他者として規定され、十九世紀には「病」という単一の形象のもとに理解されるようになるという出来事を、彼は、狂気の「疎外」とみなしていたのであった<sup>18</sup>。そしてそこから、『狂気の歴史』においては、そのようにして沈黙を課される以前の「狂気そのものの歴史」が目指されることになる<sup>19</sup>。すなわちこの著作においては、抑圧ないし疎外を被る以前の、狂気の「自然本性」のようなものが想定されていたということであり、まさしくそのような想定が、七〇年代になって問題化されることになるのだ。したがって、新たな権力分析のやり方を打ち立てようとするフーコーの身振りのなかには、過去の自分自身の思考から身を引き離そうとする努力、「別の仕方<sup>ナチュール</sup>で思考すること」への努力が含まれているのである<sup>20</sup>。

このようにフーコーは、抑圧以前の自然本性のようなものの想定を問題化する。しかもそればかりではない。さらに彼は、こうした想定そのもの、抑圧されたり解放されたりするような自然本性があるという想定そのものが、権力関係のなかでその効果としてもたらされるケースについても語っている。たとえば、『知への意志』によれば、近代西欧におけるセクシュアリティをめぐる権力は、抑圧や禁止においてではなく、むしろセクシュアリティなるものの産出とそれに関する言説の煽動においてその効果を発揮する<sup>21</sup>。つまり、権力が抑圧という語彙によって語られるのは、抑圧の背後に解放すべき何か<sup>ナチュール</sup>が想定されているからであるが、フーコーはそもそもそのような「何か」を生み出すことこそ、近代的権力の主要な機能のうちの一つであるとみなすのである。しかしそれではいったいなぜその

---

ィヴな」効果のなかにそのメカニズムを置きなおすこと（・・・）。」

<sup>18</sup> Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, Gallimard, 1972, p.463. [『狂気の歴史』、新潮社、一九七五年、四六五頁]

<sup>19</sup> Michel Foucault, « Préface » in *Dits et écrits*, Paris, Gallimard, 1994, t.1, p.164. [『ミシェル・フーコー思考集成 I』、筑摩書房、一九九八年、二〇〇頁]

<sup>20</sup> 実際、フーコー自身、後の対談において、『狂気の歴史』では「抑圧」の概念が暗黙のうちに使用されていたことを告白している (*Dits et écrits*, t.3, p.148 [『ミシェル・フーコー思考集成 VI』、筑摩書房、二〇〇〇年、二〇一頁])。

<sup>21</sup> *La volonté de savoir*, p.139. [一三六頁] (「実際には、問題はむしろセクシュアリティの産出というまさにそのことである。セクシュアリティとは、権力が屈服させようとする自然本性にもとづく所与のようなものとして、あるいは、知が徐々に露呈させようとする暗い領域として想定すべきものではない。それは、一つの歴史的装置に対して与える名である。下部に潜みそれを捉えるには困難を要するような現実ではなくて、大きな表層の網の目である（・・・）」)

ような産出が行われるのか、そのような想定がなされることが権力にとってどのような効用をもたらすのか、と問う前に、まず、次のことを確認しておこう。それはすなわち、フーコーが自然本性の想定を問題化すると同時にそうした想定を権力の効果と結びつけているということについて、ドゥルーズは完全に理解していたということだ。というのも、権力の装置は自分にとって「抑圧的な効果を保持している」、と述べた先ほどの引用箇所のすぐ後で、彼はただちに次のように言葉を継いでいるからである。「というのも、権力の装置は、自然本性にもとづく所与としての欲望を押しつぶすのではなく、欲望の組合せの先端の数々を押しつぶすからだ」<sup>22</sup>。つまり、フーコーがある種の「自然本性」についてそれを権力以前のもので想定することを拒否し、そもそもそうした想定自体が権力によって構成されたものであるとみなしていることをはっきりと見定めているからこそ、ドゥルーズは、自分の語る欲望が「自然本性にもとづく」ものではないということを強調するのである<sup>23</sup>。欲望を第一義的なものとみなし、権力を二次的なものとみなす限りにおいて、後者を抑圧の効果をもたらすものとして語らざるをえないにせよ、だからといってドゥルーズは、前者を無垢な自然本性として想定しているわけではない。すでに見てきたとおり、ドゥルーズにとっての欲望とは、さまざまな要素の分子的組合せであり、その流れである。そして権力が抑圧的なものであるとすれば、それは、権力が、そうした組合せの多様性を破壊し流れをせき止めるという効果をもたらすものであるからだ。別の言い方をすれば、フーコーが社会野を権力の戦略によってその全体を貫かれたものとみなすのに対し、ドゥルーズはそれを、いたるところで何よりもまず逃れていくもの、逃走するものと捉えているということである<sup>24</sup>。このように自然本性とは無縁の出来事としての欲望を、権力を優先させる思考は捉えることができないのではなかろうか。結局のところ、これがドゥルーズの問いであった。これに対しフーコーは、確かに、直接的に答えてはいない。しかし、彼の後のテキストを詳細に検討するならば、この問いに対する回答の断片となりうるようないくつかの記述を見つけ出すことができる。

一九七〇年代後半以来、フーコーが一つの思考の「危機」を生きたということは、しばしば指摘される事実である。そしてそのことは、おそらく間違いではあるまい。というのも、実際、『性の歴史』の第一巻『知への意志』の出版の後、八年を経て死の直前によく完成した第二巻と第三巻においては、セクシュアリティの問題を権力の軸において分析しようという当初の計画は完全に破棄され、「自己との関係」という新たな軸のもとに研究が再編成されることになるからだ。こうした研究の軸の移行についてはまた改めて触れるとして、ここでは、「主体と権力」と題された一九八二年のテキストに注目したい。というのも、ドゥルーズも一九八六年の著書のなかで参照することになるこのテキストにおいて、フーコーは、権力関係そのものを可能にする条件について語っているからだ。そこでフー

<sup>22</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.61. [一四二頁]

<sup>23</sup> 欲望が「自然本性にもとづく」ものではない、という記述は、この同じテキストのなかにも他にも数箇所見られる。*Ibid.*, pp.60, 62 [一四一、一四三頁]

<sup>24</sup> *Ibid.*, p.62. [一四三頁]

コーが権力の「存在条件」として持ち出すもの、それは、「主体」の「自由」である。「権力が行使されるのは、ただ「自由な主体」に対してだけであり、主体が「自由」であるその限りにおいてである」<sup>25</sup>。すなわち、そこで権力は、いわば主体の自由を押しつぶしにやってくるものとして語られているのであり、これは、フーコーが権力優先の思考から離脱したことの表れであるとも言えるだろう。しかしこの表明は、同時に、読者に居心地の悪い思いをさせるものでもある。というのも、これはフーコーにおける主体への回帰なのではあるまいか、という疑いがそこに生じうるからだ。実際、フーコー自身、同じテキストのなかで、主体こそが自らの恒常的な関心事であったと述べている<sup>26</sup>。したがって、フーコーの言う「自由な主体」とはいったいどのようなものなのか、と問うことが必要になるだろう。フーコーによれば、「自由な主体」とは、「自分たちの前に、数々の行動、数々の反応、そしてさまざまな行動様式が場を占めうるような可能性の領野を持つ、個人ないし集団としての主体」である<sup>27</sup>。自由を多様な可能性としてとらえつつ、権力をそうした可能性に対してはたらきかけるものとみなすという、こうした考え方は、組合せとしての欲望とその逃走から出発して社会野を考えるドゥルーズの思考への接近を示しているようにも思われるだろう。しかし事はそれほど単純ではない。というのも、まさしくこの欲望という語に関しては、フーコーはそれを最後まで拒み続けることになるからだ。

「欲望と快楽」によれば、フーコーはドゥルーズに対し、「欲望」という語はそれをどのようなやり方で用いるにせよ自分にとって耐え難いものである、と語ったという<sup>28</sup>。そして、『知への意志』にも述べられている通り、この欲望に対する「反撃の拠点」として持ち出されるのが、「快楽」である<sup>29</sup>。欲望を拒絶し快楽を称揚する姿勢、その後の数々のテキストにおいても依然として表明され続けることになるこの姿勢を<sup>30</sup>、いったいどのように理解すればよいのだろうか。フーコーがドゥルーズに語ったように、フーコーにとっての快楽は、ドゥルーズにとっての欲望と同じものなのか<sup>31</sup>。それとも、ドゥルーズが言うように、これはそうした言葉上の問題では片づけられぬものなのか<sup>32</sup>。いずれにせよ、権力に関するフーコーの思考の射程を明確に把握するためには、欲望、快楽、主体をめぐる彼の思考についてさらなる検討が必要であろう。

<sup>25</sup> *Dits et écrit*, t.4, p.237. [『ミシェル・フーコー思考集成IX』、筑摩書房、二〇〇一年、二六頁]

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.223. [一一頁] (「したがって、私の研究の一般的テーマを構成しているのは、権力ではなく、主体である。」)

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.238. [二六頁]

<sup>28</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.63. [一四四頁]

<sup>29</sup> *La volonté de savoir*, p.208. [一九九頁]

<sup>30</sup> たとえば、*Dits et écrit* t.4, p.400, pp. 738-739 [『ミシェル・フーコー思考集成IX』、二五二頁、『ミシェル・フーコー思考集成X』、筑摩書房、二〇〇二年、二五八—二五九頁] など。

<sup>31</sup> *Magazine littéraire* n°325, p.63. [一四四頁]

<sup>32</sup> *Ibid.* ドゥルーズによれば、彼にとっては逆に、「快楽」という言葉の方が耐え難いものであるという。すなわち、彼にとっては快楽こそ、主体を超え出るものとしての欲望のプロセスを中断させ、主体に対して「自分を取り戻す」ことを可能にするものなのである。ドゥルーズにおける快楽の拒絶については、*Mille plateaux*, Paris, Minuit, 1980, p.191-194 [『千のプラトー』、河出書房新社、一九九四年、一七八—一八〇頁] および Gilles Deleuze et Claire Parnet, *Dialogues*, Paris, Flammarion, 1996, pp.119-121 [『ドゥルーズの思想』、大修館書店、一九八〇年、一五〇—一五二頁] を参照。



フーコーにとって、欲望とはいったいどのようなものとして捉えられているのか。この問いに関しては、『知への意志』における倒錯的欲望に関する記述のなかに、それに答える手がかりを見つけることができるように思われる。

フーコーによれば、かつて、「男色家」とは、「性懲りもない異端者」のことであった。つまり、それは性の規範から逸脱した快楽を味わう者を名づける言葉であり、それ以上のものではなかった。これに対し、十九世紀に登場するものとしての「同性愛者」は、ホモ・セクシュアリティという「特異な一つの自然本性」を持つ者とされる。すなわち、ここでは、同性愛的な行動をとる者のことが同性愛者と呼ばれるのではなく、逆に、ある人物が同性愛的行動をとるとしたら、それはその者がその「自然本性において」同性愛的な欲望を持つからである、とされるのである<sup>33</sup>。規範に適わぬ快楽を味わう主体のうちに、そうした行動を決定づけるものとしての欲望が想定されるようになるという、こうした変化のなかに、フーコーは、単なる禁止や抑圧によってはたらくのではない権力のメカニズムの登場を見る。彼によれば、新たな権力のメカニズムは、「倒錯的」欲望を「身体の内部に侵入させ、行動の下にしひこませ、分類と理解可能性の原理とし、無秩序の存在理由であり自然本性にもとづく秩序であるものとして構成する」<sup>34</sup>。つまり、個人の身体が自然本性としての一つの欲望につながり定められることによって、「倒錯者」と呼ばれる一つの「種族」が構成され、そうした者に対する差別、治療、排除といった措置が正当化されるようになるということである<sup>35</sup>。したがって、権力による自然本性の産出は、確かに、権力自身に対して効用をもたらす。すなわち、権力の作用によって個人の内部に組み込まれた自然本性としての欲望は、その個人の種別化を可能にしつつ、その個人に対する権力の介入のための拠点として役立つのだ。権力関係のなかで産出される欲望は、このように、権力にとっての特権的な「道具」として機能するのである。

そしてさらに、フーコーは、このようなものとしての性倒錯の確立を、性をめぐる権力のより包括的な戦略のなかに位置づける。彼によれば、権力関係の新たなエコノミーのなかで、性には、「無尽蔵かつ多形的な原因としての力」が付与されるようになる<sup>36</sup>。それによって、「性とその快楽に関する真理」<sup>37</sup>として個人の内部に組み込まれた性的欲望ないしセクシュアリティは、ただ単に性的行動の説明原理とされるばかりではなく、個人のあらゆる行動を理解するための秘密を保持するものとして考えられることになる。性的欲望を通じて、主体が決定可能なものとして差し出されるということ。性的欲望の真理を語らな

<sup>33</sup> *La volonté de savoir*, p.59. [五五—五六頁]

<sup>34</sup> *Ibid.*, p.60 [五六頁]

<sup>35</sup> *Ibid.*, p.59. [五五—五六頁]

<sup>36</sup> *Ibid.*, p.88 [八五頁]

<sup>37</sup> *Ibid.*, p.91. [八九頁]

ければならないとすれば、それは、その真理こそが「我々の真理を闇のなかで握っている」からなのだ<sup>38</sup>。西欧における性の告白が果たしてきた役割も、ここから理解しなければならない。すなわち、自分のすべての欲望を言説化しようと努めるべし、という至上命令は、「性こそがすべての理由である」<sup>39</sup>とみなしつつ主体の真理を強奪しようとする権力の戦略のなかに位置づけられるということだ。フーコーが示すのは、性的欲望が、主体についてのあらゆる真理を語りつつそうした主体への介入を可能にするものとして、「権力の関係にとって極めて密度の高い一つの通過点」を構成しているという、このことなのである<sup>40</sup>。

今や、フーコーが欲望をどのようなものとして捉えているかということは明らかであろう。彼があればほどまでに拒絶するのは、「我々が誰であるか」という秘密を保持するとみなされたものとしての欲望である。すなわちそれは、権力の道具として、我々の真理を語りつつ、我々の行動の多様な可能性を制限することに役立つものとしての欲望なのだ。そしてまさしくここから、「快楽」が反撃の拠点であるとはどういうことなのか、「自由な主体」という言葉に何が含意されているのかということも理解できる。すなわち、いずれも我々が一つの真理につながとめられることに対する拒絶の表明なのだ。「自由な主体」とは、我々を決定すると称する真理から自由であるような主体のことであり、新たに発明すべき快楽とは、性の王権と欲望の桎梏を逃れるような快楽なのである。一九八二年のテキストのなかでフーコーは、権力に抗するために欲望の称揚を用いるやり方を断固として拒絶しつつ、自分の問題が、「我々がそうであるところのものを発見することではなく、それを拒否すること」であると明言している<sup>41</sup>。要するに問題は、抑圧されているとみなされた欲望を解放することではなく、主体を決定するものとしての欲望からの解放なのであり、それゆえに、フーコーにとって欲望は最後まで大いなる躓きの石であり続けるのだ。

もちろん、フーコーがこのように忌避する欲望は、ドゥルーズの言う組合せとしての欲望ではない。というよりもむしろ、すでに触れたとおり、自然本性として捉えられた欲望は、まさしくドゥルーズが拒絶するものである。したがって、いわば、彼らは同一の出発点を持っていた、とさえ言えるだろう。つまり、両者ともに、既成の欲望概念に対する異議申し立てから出発したということである。しかも二人は、ともに、ミクロのレヴェル、分子的なレヴェルに目を向けて分析を行う。ただし、そこから道が分かれ、一方が新たな欲望概念の創出に進むのに対して、他方は、自然本性としての欲望が産出されるプロセスの歴史的な分析へと向かうことになる。ドゥルーズが、分子的なものとしての欲望のざわめきを社会野の構成要素とみなすのに対して、フーコーは、やはりミクロのレヴェルに目を向けながら、そこに、欲望を真理として構成する権力の戦略を告発することになるのである。そして、このようなフーコーの選択は、彼のすべての仕事を一つの恒常的な関心が貫いていることを考慮に入れて初めて理解できるものとなるだろう。最初期のテキストから

<sup>38</sup> *Ibid.*, p.102. [一〇二頁]

<sup>39</sup> *Ibid.*, p.103. [一〇三頁]

<sup>40</sup> *Ibid.*, p.136. [一三三頁]

<sup>41</sup> *Dits et écrits*, t.4, p.232 [二〇頁]

晩年の著作にいたるまで彼の研究を動機づけていると思われるその関心とはすなわち、主体と真理との関係をめぐる関心である。

まず、一九五〇年代の彼が残したいくつかのテキストについて。しばしば「前フーコー的」と形容されるとおり、それらは確かに、その後の彼の仕事とは根本的に相容れない要素を含んでいる。一九五四年公刊の『精神疾患と人格』において、フーコーは、精神疾患の「実在的起源」<sup>42</sup>を社会における「疎外の経験」のうちに標定することによって<sup>43</sup>、精神を病む者の「謎に満ちた主体性の秘密」を明らかにしようと試みていた<sup>44</sup>。また、同じ一九五四年に出版されたビンスヴァンガーの『夢と実存』への「序文」において目指されていたのは、夢の経験のなかに「実存そのものの起源」<sup>45</sup>を見いだすために、「夢の経験の根源的な主体性」を「客体化」してしまった精神分析学に対して異議を申し立てつつ、そうした主体性を明るみに出すような分析を提示することであった<sup>46</sup>。つまり、これらのテキストにおいて問題になっていたのは、マルクス主義的ないし実存主義的分析に訴えつつ、いわば真の「主体の学」を打ち立てることであり、これは以後のフーコーが徹底して拒絶することになるものである。しかし、そもそもこうした試みを動機づけているのは何かと言えば、それは、主体に対してポジティブな真理を課そうとする既存の心理学に対する異議申し立てである。すなわち、そこで問題になっているのは、主体を客観的な認識の対象とするやり方を批判的に検討しつつ、主体に対するそれとは別のアプローチを探ろうとする試みなのだ。要するに、フーコーの思考の出発点そのものにあるのが、主体と真理との関係をどのように考えるかというこの問いなのである。

「考古学」と呼ばれる一九六〇年代の研究の中心に置かれているのも、やはり主体に対して課される真理をめぐる考察である。ただし、五〇年代のテキストにおいては新たな「主体の学」の創設が目指されたのに対し、今度は、主体としての人間を認識の対象と定める思考の可能性そのものが問題化されることになる。まず、「フーコー的」な最初の著作とされる一九六一年の『狂気の歴史』は、狂気というネガティブな経験から出発してポジティブな人間の真理を語ろうとする心理学的な試みが孕んでいる逆説を告発しつつ、そこに潜む公準、すなわち、「人間は、与えられていると同時に隠されている一つの真理を、自らに固有に属するものとして保有する」という公準を暴き立てる<sup>47</sup>。また、十八世紀以来の西欧医学の刷新を扱った一九六三年の『臨床医学の誕生』は、近代医学の登場が個人に関するポジティブな認識一般のための「突破口」としてどのように役立ったかということについて言及している<sup>48</sup>。そして、一九六六年の『言葉と物』が描き出そうとするのは、人間

---

<sup>42</sup> Michel Foucault, *Maladie mentale et personnalité*, p.89. [『精神疾患とパーソナリティ』、筑摩書房、一九九七年、一四七頁]

<sup>43</sup> *Ibid.*, p.83 [一三六—一四八]

<sup>44</sup> *Ibid.*, p.69 [一一二頁]

<sup>45</sup> *Dits et écrits* t.1, p.91. [一一一頁]

<sup>46</sup> *Dits et écrits* t.1, p.98. [一二一頁]

<sup>47</sup> *Histoire de la folie*, p.549. [五五一頁]

<sup>48</sup> Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, Paris, P.U.F., 1963, p.199. [『臨床医学の誕生』、みすず書

主体が知の特権的な対象として成立することを可能にした歴史的諸条件である<sup>49</sup>。このように、六〇年代のフーコーの仕事は、いずれも、主体と真理とが結びつけられてゆく歴史的プロセスについての考察を中心に組織されている。五〇年代の自らの思考から決定的なやり方で離脱しながらも、当初の関心はその姿を変えつつ依然として存続しているのである。

一九七〇年代の権力分析についてはすでに見てきたとおりである。すなわち、そこで中心になっていたのは、権力のメカニズムのなかで主体に対してどのように真理が課されるのか、そしてそのような真理が権力の作動にどのように役立つのかという問題であった<sup>50</sup>。そして、「自己との関係」という第三の軸をめぐって研究が再編成されることになる八〇年代においても、核心にあるのはやはり、主体の真理をめぐる問題に対する関心である。というよりもむしろ、第二の軸から第三の軸への移行そのものが、この関心によって動機づけられているとも言える。というのも、『性の歴史』第一巻に提示された当初の計画においては、セクシュアリティが主体の真理として構成されてゆくプロセスが、もっぱら十七世紀以降成立した権力関係の分析によって考察されることになっていたのに対し、八年後に公刊される第二巻と第三巻においては、この同じプロセスが、古代ギリシャ・ローマにおける「主体化」の問題として探求されることになるからだ。すなわち、欲望のなかに自らの真理を発見しようとする主体について、権力の軸にとどまっていたはその系譜を解明することができないということが明らかになったからこそ、計画を変更し、時代を遡る必要があったのである<sup>51</sup>。逆説的なことながら、主体と真理との関係という一貫したテーマに忠実であることこそが、フーコーに対し、同一の地平にとどまって研究を続けることを許さなかったのだ。

したがって、「主体性と真理」と題された一九八一—一九八二年度のコレージュ・ド・フランス講義要旨に書き記されているフーコーの次の問いを、単にその年の講義における問いとしてではなく、彼の仕事全体を貫く問いとして理解すべきであろう。「どのようにして主体は、制度のさまざまな時期およびさまざまな文脈において、可能な認識の対象、望むべきあるいは不可欠でありさえする認識の対象として打ち立てられてきたのか。どのようにして、自己についての経験、その経験についてひとが形成する知は、一定の図式を通して組織されてきたのか。どのようにしてそれらの図式は決定され、価値づけられ、推奨され、押しつけられてきたのか。」<sup>52</sup>。フーコーにとって欲望が耐え難いものであるとすれば、それは、欲望が、主体をその真理に結びつける権力にとっての重要な契機を構成している

---

房、一九六九年、二六七頁]

<sup>49</sup> Michel Foucault, *Les Mots et les Choses*, Paris, 1966 [『言葉と物』、新潮社、一九七四年] 第二部第九章、第十章を参照。

<sup>50</sup> 『監獄の誕生』においても、やはり中心に据えられているのは、個人に対して真理が課されるようになるメカニズムの分析である。特に第四部第二章における「デランカンス」についての記述を参照。

<sup>51</sup> Michel Foucault, *L'usage des plaisirs*, Paris, Gallimard, 1984 [『快楽の活用』、新潮社、一九八六年] 序文を参照。

<sup>52</sup> *Dits et écrits* t.4, p.213 [『ミシェル・フーコー思考集成Ⅷ』、筑摩書房、二〇〇一年、四四三頁]

からである。欲望とともに彼が明るみに出しつつ糾弾するのは、個人を真理につなぎとめようとする権力、「個人を、カテゴリーに分類し、その固有の個別性によって指し示し、その同一性に縛りつけて、個人に対し自分も他者も認めなければならないような真理の法則を課す」ものとしての権力なのだ<sup>53</sup>。欲望の拒絶は、そうした権力に対する根本的な異議申し立てであり、快楽と自由の提唱は、真理と欲望による包囲網に対する反撃の狼煙なのである。

\*

ドゥルーズの問いかけから出発した我々の考察は、こうして、フーコーの権力分析が、何よりもまず主体の真理を産出するものとしての権力を標的に定めているということを明らかにすることができた。フーコーが権力を構成的なものともみなしているとしても、それは、権力を社会野の第一義的な説明原理として利用するためではなく、個人に対して課される真理が構成されるプロセスを明るみに出すためなのだ。要するに、権力に関するフーコーの研究は、知や主体化に関する研究と同様、主体と真理とのあいだの関係をめぐる彼の一貫した問題系のなかに位置づけ直して初めてその射程を理解することができるのである。

「欲望」と「快楽」は、二人の哲学者がそれぞれに異なる問題を思考するために創造したそれぞれに異なる概念である。「欲望か快楽か」という問いが可能であるとすれば、それは、我々がどちらを我々自身の問題として引き受けるのかという選択、ただし必ずしも二者択一とは限らない一つの選択にかかわるものとなるだろう。彼らが放った矢のどちらを拾い上げるのか。そしてもちろん問題は、我々がそれをどのように再び投げ放つかということだ。

---

<sup>53</sup> *Ibid.*, p.227 [一五頁]